

第25回 山陰本線二条駅で下車して

■ JR二条駅前

今回は、JR二条駅で降りて、その東南の地域をめぐるでしょう。北は二条城南の堀に沿った押小路通、南は六角通、東は大宮通、西は千本通で囲まれた地域です。この地域は、大内裏の南側で、平安時代を通じての文教地区でした。二条城が築かれて、江戸時代になってからは、京都町奉行所をはじめとする行政官庁地区でした。

山陰本線二条駅で下車すると、まずおどろくのは、高架のホームを覆う屋根です。写真に示すように、木造トラスの曲面で、およそ駅らしくない斬新な形をしています。ただ、高架で吹きさらしなので、冬は寒いだろうかと、要らぬ心配をしていますが。通常の駅屋根の部分が、カブトガニの尾っぽよろしく付属しています。それでも、長い連結の電車だと、かなりの部分ははみ出してしまうので、雨の日はどうなるのだろう。

なお、高架化以前の旧駅舎は、一九九六年に梅小路蒸気機関車館の玄関兼展示館として移築され、京都市指定有形文化財に指定されています。

一昔まえは、どちらかというとき京都市街のはずれでしたが、一九九七年に地下鉄二条駅が開設。JR二条駅と連絡し、さらに



二条駅



立命館大学と仏教大学

は、地下鉄が天神川駅まで伸延されるなど、最近では、交通の便利な地域として変貌しつつあります。駅東側の整備が進んでおり、駅東側に沿って最南部に、立命館大学朱雀キャンパスの建物があり、北隣に仏教大学が建設中。また、駅の西側にも、複合商業施設「B'Vi二条」(食堂街、店舗、映画館など)があります。

駅前には、鴟尾しびが付いた建物を模した案内板があります。平安時代にこの付近にあった朱雀門(大内裏の正門)を模したものです。屋根の南側には、平安京全図、八省院(朝堂院、大極殿)や豊楽院の復元図、伴大納言絵詞(応天門炎上部分図)などが描かれています。屋根の北側は、二条駅付近でおこなわれた発掘調査

北角には、二条城の隅櫓が見えます。

大学寮は、平安時代の高等教育機関で、五位以上の子弟の教育をおこないました。式部省の管轄で、長官は大学頭。その下に、教官として、明経博士（単に博士ともいう。経書の教授）、文章博士（詩文の教授、令外の官）、明法博士（法律の教授）、算博士（算術の教授）、音博士（中国語発音の教授）書博士（書道の教授）などが置かれていました。学科としての名称は、明経道、紀伝道（文章道）、明法道、算道、音道、書道。

『拾芥抄』（鎌倉中期成立）には、「式部省」の下に「大學寮」の項があつて、当時の官職が列挙されています。インターネット（<http://hdl.handle.net/2433/277>）で影印が入手できますので、翻刻しておきましょう。

二条南朱雀大路東
神泉
大学寮
苑西

頭 助正 允少 属大 文章博士

明経博士如除目不加明経
二字或大学博士 助教 直講命外 明法博士

算博士 音博士 書博士

行政官は、大学頭を筆頭に、大学助（「正」は略すことが多い）、大学権助などの役があることがわかります。允少と正となつていますので、大学允・大学少允と呼んでいたと考えられます。通常は、大允・少允のように呼ぶことが多いのですが、ちなみに、「属大」の割書によって、属少の場合は、大属・少属の対で呼んでいることがわかります。教官の項の明経博士の割書には、「除目の如きは、明経の二字を加えず。或は大学博士」とあり、単に「博士」とい



地蔵尊の小祠



「此附近 大學寮址」碑



二条城西南

えば明経博士を差すことを明示しています。

この翻刻でわかるように、最初の部分に大学寮の所在が示されています。「二条南、朱雀大路東、神泉苑西」とあり、南限は特定されていません。ただ、別のところには（次に引用するように）南限は三条坊門小路と記されていますので、これと同じとみますと、四町を占める広大な敷地をもっていたこととなります。なお、神泉苑の所在は、「二条南大宮西八町三條北 壬生東」と記載されています。便宜のために、この付近の地図国土地理院の電子国土ポータル (<http://portal.cyberjapan.jp/>) からえた地図に、大学寮や神泉苑の所在を書き込んだ略図を示します。

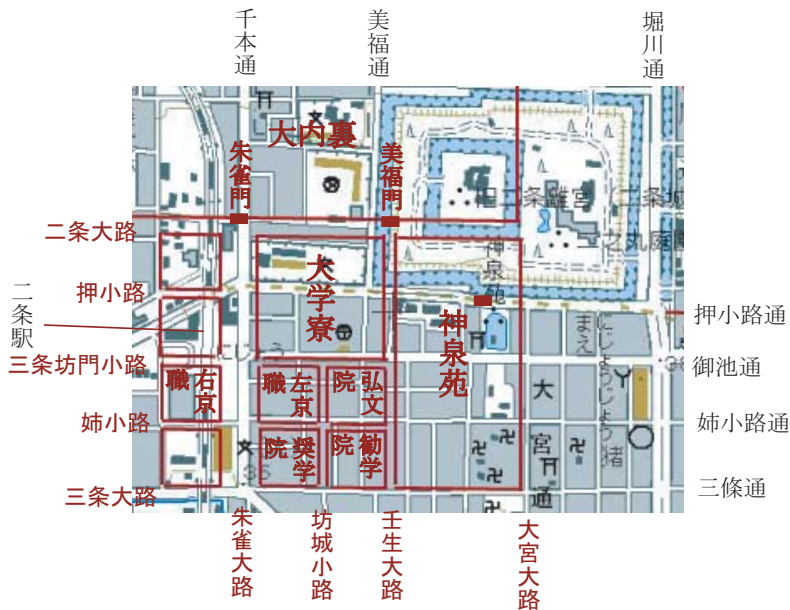
さらに、『拾芥抄』の別のところには、次のような記載があります。

大學寮一町二條南、三條坊門北、壬生西、坊城東、

この敷地だと、西半分がなくなつて、二町に半減しています。ただし、「大學寮一町」の「一町」とは矛盾しますので、二町になったあと、最終的には、一町にまで狭くなつたと推定してよいでしょう。

三条坊門小路は、現在の御池通に相当し、壬生大路は、現在の美福通に相当します（現在の美福通は、壬生大路の少し西側にあります）。当時の大内裏の美福門は、二条通に面し、そこから壬生大路が南に延びていました。『拾芥抄』の記載に従えば、石碑の建つているところは、大学寮の東部中央附近であることがわかります。

「博士」といえば明経博士を差したように、初期の大学寮で



大学寮、弘文院、勸学院、擬学院の所在
国土地理院の電子国土ポータルよりえた地図をもとに作成

は、明経道が重んじられました。神龜五年（七二八）に文章博士が令外の官として設けられましたが、官位としては、明経博士より下におかれていました。平安時代に入ってから、次第に紀伝道（文章道）が重視されるようになり、弘仁一二年（八二二）に文章博士を従五位下とし、官位のうえでも、明経博士よりも上位におかれるようになります。このことに関しては、菅原清公（宝龜元年（七七〇））承和九年（八四二）、延暦二三年（八〇四）遣唐使の力が大きい。子弟の教育に力を注いだ結果、子の菅原是善、孫の菅原道真も文章博士になり、事実上世襲の形になります。菅原道真の失脚（昌泰四年（九〇二））のあとは、大江氏が力をもつようになります（なお、道真の子淳茂も、父道真の事件に連座しましたが、許されたのち、文章博士になっています。本シリーズ第18回を参照）。平安中期ころから、大学寮敷地内の北側に設立された文章院の東曹を大江氏、西曹を菅原氏が受け持つようになり、教官等の世襲の傾向が強くなりました。

大学寮の学制はどうなっていたか。文章道についていえば、達成度に応じて、擬文章生（擬生）↓文章生（文人または進士）↓文章得業生（秀才）と進むことになっていました。現在の学士・修士・博士の学位に相当するとみればよいでしょう。

■ 大学寮の焼失

大学寮は、平安時代を通じて機能したようですが、鎌倉幕府が開かれる直前に、安元の大火（安元三年（一一七七））、八月に改元して治承元年）で焼失してしまい、その後は再建されませんでした。本シリーズ第1回でも引用しましたが、『方丈記』の記載

を再度引用しておきましょう。

（前略）はてには、朱雀門・大極殿・大學寮・民部省などまで移りて、一夜のうちに塵灰となりなき。

『方丈記徒然草』岩波古典文学大系。西尾實校注（一九五七）ただし、旧字体を新字体に変更したところがある。

九条兼実（久安五年（一一四九））承元元年（一一〇七）の日記『玉葉』安元三年（治承元年（一一七七））五月二八日の条には、さらに具体的に焼失した建物の記載があります（訓点と振りがな追加）。

焼亡所々

大極殿以下、八省院一切不_レ残、

会昌門、応天門、朱雀門、神祇官八神御正 跡焼失、民部省図帳倉不二 焼亡云々、

主計寮、主税寮、式部省、真言院向界曼陀羅のつかさ 同以焼亡、主水司、大膳職、

大学寮孔子御影 奉二取出之、勸学院等云々、

公卿家

関白錦小路 大宮、内大臣、源大納言在二西京云々、已上三人、二位大納言三条西 洞院、中宮大夫、二位中将已上四条大宮、町内兩方候之云々、藤大納言三条油

藤中納言綾小路 西洞院、別当三条 堀川、源中納言三条 猪熊、堀川宰相綾小路 堀川

大宮権大夫在二西京、不 任之家也、左大弁六角 大宮、五条大納言二条油小 路直盛也、

已上公卿十四人云々、

九条兼実『玉葉』

『圖書寮叢刊九条 家本玉葉五』、明治書院（一九九八）

八省院は、大内裏の正門である朱雀門を入ると正面にあり、八省院の正門が応天門、中門（朝堂院へ入る門）が会昌門です。大極殿は、朝堂院の広庭の北（八省院の最北の一角）を占めています。「大極殿已下、八省院は一切残らず」とありますから、全部焼けてしまったことが判明します。そのほかの焼失したとしてあげられているのは、大内裏の東南地域（八省院の東側）にあった建物です。今回の話題に関係ある大学寮と勸学院（後述）も焼失したことが記されています。大学寮の記載のところに割書で、「孔子の御影、之を取出し奉る」とあり大学寮の孔子廟にあった孔子像は、持ち出して無事だったことがわかります。

『玉葉』らしいところは、焼失した建物の具体的な記述のあとに、過去の火事の例を調べた結果が記されていることです。たとえば、大極殿の炎上は貞観十八年（八七七）と天喜六年（一〇五八）の二回あり、そのあと改元がおこなわれたことを記しています。また、真言院・大学寮・勸学院についてはこれまでに火事に遭っていないと記しています。

安元の大火の消失範囲については、『玉葉』には「東は富小路、南は六条、西は朱雀以西、北は大内裏。火事の間には、辻風（火災旋風）が度々吹いた」との記載があります。『方丈記』や『玉葉』の記載でわかるように、安元の大火（太郎焼亡）では、市街のみならず、行政や教育の中枢が焼け落ちたわけで、平安時代の終末を告げる象徴的な事件です。

押小路通と御池通の間の東西の通りを、千本通から東へ進むと、丁字路で突き当たりますが、その西北角のお宅に、町名看板「西ノ京北聖町」①が掲げてあります。「北聖」は、平安時代に大



西ノ京北聖町 ①

学寮があり、聖人の道を学んでいたことに因んだ町名でしょう。

■ 平安時代の学者先生

■ 紀長谷雄の場合

大学寮は今でいう国立大学で、文章博士や明法博士は、大学の学者先生です。『今昔物語』には、学者先生の行状を揶揄する話がいくつか載っています。大学寮や文章博士や明法博士が出てきたついでに紹介しておきましょう。昨今もそうですが、尊敬半分、冷やかし半分といったところですよ。

『今昔物語』巻二八に、文章博士紀長谷雄の文才を称揚する一方で、陰陽道には詳しくなかったことを揶揄する話があります。ただし、『今昔物語』はどちらかというと、陰陽道を重くみる話が多いので、割り引いて読む必要があります。当時は天変地異・病気の流行などをすべて鬼の仕業とする以外に合理的な説明がでないのので、陰陽道（あるいは宗教的な祈祷）を重くみるのは、

世間一般の傾向でした。それにしても、この紀長谷雄の話については、一般の傾向以上にバイアスがかかっているように感じられます。

中納言紀長谷雄家顕狗語第二十九

今昔、中納言紀長谷雄ト云フ博士有ケリ。才賢ク悟広クシテ、世ニ並ビ無ク止事無キ者ニテ有ケレドモ、陰陽ノ方ヲナム、何ニモ不知ザリケリ。

『今昔物語』巻二八第二九

(馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語』

新編日本古典全集38、小学館、二〇〇二)

話を要約しておきましょう。

犬が屋敷に入つて「尿」をするのが頻繁なので、紀長谷雄は「あやしいことがおこるのではないか」と陰陽師に吉凶を占つてもらいました。「某月某日に、鬼があらわれる。ただし祟りをなすようなものではない」との占い。紀長谷雄は「物忌をしなれば」といいながら、すっかり忘れてしまい、その日に学生を集めて詩文を作っていました。すると、塗籠(妖怪の隠れているところ)の中から恐ろしい吠え声が聞こえたので、塗籠の戸を少し開けると、二尺ばかりの身長で、体・手足は白く、頭は黒く、角が一本生えた得体の知れないものが出てきました。ところが、学生の一人が頭を蹴ったところ黒いものがとれて、全身が白い犬がきゅんと鳴いてあら

われました。なんのことはない、犬がはずみで柄のついた盥を被つたところ、とれなくなって鳴きわめいていただけでした。わかつてみると、皆大笑い。陰陽師の占いがことごとく当たつたことを賞賛しました。「それにしても、学問があるはずの博士が物忌をわすれるなど情けない話だ」と、紀長谷雄について噂しあつたと語り伝えられています。

この内容はたわいのない妖怪話。陰陽師の占いも、「あたるも八卦、当たらぬも八卦」の類で、どうにでもとれる内容です。それを賞賛しながら、紀長谷雄については「学問があるといつても、文章がうまいだけじゃないか。物忌を忘れて、結果的に陰陽道を軽視してしまうのは、バランスを欠いている」というような揶揄を含んだ話になっています。

こんな話を誰が広めたのか。ついでに、根拠のない憶説を考えついたので、忘れないように書き留めておきましょう。本シリーズ第2回で、紀長谷雄を痛罵した三善清行の話(『今昔物語』巻二四第二五)を載せましたが、三善清行は、文章博士で陰陽天文にもあかるかったと伝えられています。『今昔物語』巻二八第二九の話は、「紀長谷雄よりも三善清行のほうがすぐれているということ、暗に示そうとしているのではないか。つまり、「三善清行なら物忌を忘れるようなドジはしない」とでもいいかげです。本シリーズ第2回で取りあげた話も、同様の趣旨の話です。筆者の見立てでは、三善清行は、詩文を作る点では紀長谷雄に劣ることを自覚していたので、陰陽道を持ち出して、この点では自分

の方がすぐれているとして、バランスを取ろうとしていたのではないか。いわば、嫉妬の裏返しですね。『今昔物語』の本文では、吉凶を占ってもらった陰陽師の名前は、のちに記入するように余白を空けてあります。この余白には三善清行に關係のある陰陽師の名前を入れるつもりではなかったか。探したけれども結局見つからなかったたので、空白のまま残されてしまったのではないか、という憶測です。

大学寮が出てくる話をもう一つ。紀長谷雄の名誉回復をしておきましょう。『今昔物語』巻二四第一に、「北辺大臣長谷雄中納言語第一」と題する話があり、後半に紀長谷雄が「靈人」をみたことを述べています。次に後半部分を引用します（表現を変更したところがあります）。

北辺大臣長谷雄中納言語第一

（前略）亦、中納言長谷雄ト云ケル博士有ケリ。世ニ並無カリケル学生也。其人、月ノ明リケル夜、大学寮ノ西ノ門ヨリ出テ、礼□門ノ橋ノ上ニ立テ北様ヲ見ケレバ、朱雀門ノ上ノ層ニ、冠ニテ褰着スル人ノ、長ハ上ノ垂木近ク有ルガ、吹ヲシ、文ヲ頌シテ廻ルナム有ケル。長谷雄此ヲ見テ、「我レ此レ靈人ヲ見ル。身乍ラモ止事無ク」ナム思ケル。此レ亦希有ノ事也。

『今昔物語』巻二四第一

（馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語』

新編日本古典全集 37、小学館、二〇〇二）

「礼□門ノ橋」（本文「礼□ノ橋」を注により変更）を「羅城門

の階」（「らせいもん」「らいせいもん」は古訓）と解する説もあるようですが、羅城門から朱雀門を見るのはいくらなんでも遠すぎますし、夜に二条近辺の大学寮から九条近辺の羅生門にわざわざ出かけるのも不自然のように思います。もつとも、靈人を見る能力があるのだから、そのくらいの距離は問題ないと茶々をいれられそうですが、「礼□門ノ橋」（□を成とあてる場合もあり、この場合は礼成門）が大学寮の西門を出るとすぐにあると読めるので、朱雀大路の側溝に架かる橋のことかとも考えられます。あまり本質的なところではないので、これくらいで詮索は止めておきましょう。

そこで紀長谷雄が見たのは、垂木に届くくらい身長が高く、冠と褌（脇の下を縫わずにあけた袍で武官の正装）を着けた人で、詩文を朗詠しながら、朱雀門の上層を廻っていました。長谷雄は、「これは靈人（神靈が人の姿であらわれた化身）にちがいない。我ながら不思議なことだ」と感じ入りました。『今昔物語』のこの話は、「詩文を深くきわめた人だけが、化身を見ることができるので、このような奇異をみた昔の博士はすごかった」と結ばれています。

■ 清原善澄の場合

今昔物語巻二九に明法博士清原善澄の話があります。「今は昔」と、清原善澄の紹介で始まります。

明法博士善澄被殺強盜語第二十

今昔、明法博士ニテ助教清原ノ善澄と云フ者有ケリ。

道ノ才ハ並無クシテ、古ノ博士ニモ不劣又者ニテゾ有ケル。年七十二余テ、世ノ中ニ被用テナム有ケル。其レガ家極ク貧カリケレバ、万ツ不叶デゾ過ケル。

『今昔物語』巻二九第二〇

(馬淵和夫、国東文麿、稲垣泰一校注・訳『今昔物語』

新編日本古典全集38、小学館、二〇〇二)

上に『拾芥抄』を引いて大学寮教官の官位を列挙しましたが、「助教」は、明経博士の下位の教官を差します。したがって、清原善澄は、明法道(法律)のほかに、明経道(経書)も教えていたということになります。この紹介文を見るかぎり、当時でも学者は貧乏をしていたとみえます。事件のあらましを次に要約しておきましょう。

そんな貧乏な屋敷にも、強盗が入ります。身の危険を感じた清原善澄は、強盗が物色している間、床の下に潜って隠れておりました。強盗が家を出たの見計らって、善澄は門から出て、「おまえたちの顔はしかと見た。夜が明けたら、検非違使の別当に通報して片端から捕らえるぞ」と腹立ち紛れに怒鳴ります。これを聞いて、強盗どもは引き返し、善澄を打ち殺してしまします。世人は、「善澄才ハ微妙カリケレドモ、露、和魂、無カリケル者ニテ、此ル心幼キ事ヲ云テ死ヌル也トゾ」と噂して馬鹿にしたと伝えられています。

「才」は学問の能力(漢才)です。それに対比して使っている「和魂」は、今の言葉では、「思慮分別」というべきところでは

漢才(学問)があつても和魂(常識)がないくらいの意味でしょう。

■ 弘文院の跡

御池通の西ノ京職司郵便局の並び、西へ少し進んだところに「此附近弘文院址」の碑が建っています。



「此附近弘文院址」の碑

弘文院は、平安時代初期に和氣広世(生没年不詳)によって開かれた大学別曹(和氣氏の子弟ための寄宿舎)。広世は和氣清麻呂の長子で、延暦年間(七八二〜八〇六)に大学別当となり、大学寮の南の私邸を弘文院としました。延暦年間に創設されたことと、日本における私立大学の始めということになります。

『日本後紀』巻八の延暦十八年(七九九)二月乙未の条に、和氣清麻呂薨去の記事があり、その業績を記載している中に、長男の和氣広世が弘文院を創設したことが記されています。

長子廣世。起_レ家補_ニ文章_一生_ニ。延暦四年坐_レ事被_レ禁_一。錮_ニ。特降_ニ恩詔_ヲ。除_ニ少判事_ヲ。俄授_ニ從五位下_ヲ。爲_ニ

式部少輔。便（きら）為（ニ）大學別當。墾田廿町、入（レ）寮（ニ）為（ニ）勸（一）學（ト）料。請（レ）裁（コ）闡（ル）明經四科之第（一）。又大學會（ニ）諸（ト）儒（ト）講（ル）論陰陽書、新撰藥經、大素等（ヲ）。大學南邊以（ニ）私宅（ト）置（ク）弘文院。藏（ス）内外經書數千卷。墾田卅町永充（ク）學（ト）料。以（テ）終（ル）父志焉。

『日本後紀』卷八

『日本後紀』黒板勝美、国史大系編集会、吉川弘文館（一九八九）

（書き下し文）

長子廣世。家を起し、文章生（もんじやうしやう）に補す。延暦四年、事に坐して禁錮（きんこ）を被る。特に恩詔（おんしう）を降す。少判事を除す。俄（わか）に従五位下を授く。式部少輔と爲す。便（きら）に、大學別當と爲す。墾田廿町、寮に入れて勸學料と爲す。明經四科の第を裁闡するを請ふ。又大學に諸儒と會す。陰陽書、新撰藥經、大素等を講論す。大學南邊（だいがくなんべん）に私宅（しやくたく）を以（もつ）て弘文院を置く。内外の經書數千卷を藏す。墾田卅町、永（なが）く學料に充（あ）つ。以（もつ）て父の志を終（お）る。

「和氣広世が大学寮で、陰陽書、新撰藥經、大素を講じた」という記載に関して、「藥經大素」とつなげることによつて、「和氣広世が日本最古の医薬書『藥經大素』を書いた」という俗説がおこなわれるようになりました。『新撰藥經』とは『新修本草』のことといわれていて、「藥經大素」とつなげるのは誤りです。また、「等」の位置から考えて、『日本後記』の記述は上記のように訓読するのが正しいのに、誤つて（故意かもしれませんが）

「講論陰陽書、新撰藥經大素等」と（陰陽書を講論し、藥經大素等を新撰す）と訓読したことが、この俗説が広まった原因です。このように訓読すると、陰陽書「等」となっていないのに、「藥經大素等」となるので、あきらかにおかしい。後世に、著者を和氣広世に仮託した『藥經大素』という書名の偽書が出て、しかも、これが塙保己一編、『続群書類従』三〇下雜部卷第八九一として採録されたことから、ややこしいことになっていきます。この間の事情は、真柳誠による『日本の医薬・博物著述年表』(<http://mayanagi.hum.ibaraki.ac.jp/paper01/ChronoTabJpMed.html>)にも「寛文元年（一六六一）〜延宝元年（一六七三）『藥經大素』の偽撰」と記されています。偽書『藥經大素』の内容については、真偽の判断は筆者にはできませんが、一見するところ便利な記述もあるようなので、和氣広世に仮託せずに別の書名で出版すれば、何の問題もなかったはずですが。偽撰から三〇〇年以上たった今の時点でみると、仮託さえしなければ、古典として正當に評価されるはずなのに、ちよつとした助平心が仇になっていますね。弘文院の所在については、『拾芥抄』は「勸學院の北に在り」と記していますから、三条坊門小路（現在の御池通）の南、姉小路の北、壬生小路（現在の美福通の一筋西のあたり）の西、坊城小路の東の一町を占めていたことになりました。三条坊門小路を挟んで、大学寮の南隣ですので、ちよつど「大學南邊」にあたります。弘文院は、創建ののち八〇年程度は続いたのは確実ですが、和氣氏の衰退とともに廃絶したと推定されます。

和氣広世の子孫は、室町時代に半井（なかい）の姓を賜り、典藥頭として朝廷に長く仕えました。半井家は、丹波康頼の『医心方』を今日

まで伝えた家柄としても有名です。『医心方』半井家本として国宝になっています。半井家本『医心方』が、広く世にでるきっかけになった事件については、森嶋外『渋江抽斎』の中で触れられています。

■ 西ノ京職司町と御土圍地蔵尊—江戸時代には

「此附近弘文院址」の碑が立っているところの向かい側、坊城通が始るところ、西南角に、町名看板「西ノ京職司町」②が掲げられています。一筋西に戻った通りを南にゆくと突き当たりの東北角に、同じ住所の町名看板③があります。



西ノ京職司町 ②



西ノ京職司町 ③

このあたりは、明治時代には、葛野郡朱雀野村大字西ノ京職町とよばれていたところでした。平安時代には、左右の京職が置かれ、分担して京都の司法、行政、警察を司っていました。町名「西ノ京職司町」は、このことに由来しています。先ほどの略図でわかるように、弘文院の西隣が左京職です。右京職は、今の二条駅の付近にありました。江戸時代には、二条城の周囲は、京都司政のための官庁街というべき地域になったので、時代を跨いで、この地域にふさわしい町名です。

看板②の掲げるところから、南北の通り（坊城通）を南にゆくと、初めての十字路の東北角に地蔵尊の祠があります。その脇に同じ住所の町名看板④が掲げてあります。地蔵尊の名前は、御土圍地蔵。

なぜ、御土圍地蔵という名がついているのか？ どうも気になって仕方がないので、例によって詮索してみました。まず、可能性があるのは、豊臣秀吉が作った御土居に関係があるのではないかとありますが、御土居はるか西を走っているので、それとは関係なさそうです。

具合のよいことに、インターネット (<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/maps/>) から二条御城廻絵図（京都大学図書館蔵）が入手できますので、これを手がかりにして詮索してみました。あとでも参照しますので、一部を切り取って、作図した部分図を示します。図中「土屋越前守」とあるのが東町奉行所で（現在の西ノ京職司町東側に相当）、「土屋越前守組屋鋪」とあるのが東町奉行所与力・同心屋敷です（現在の西ノ京南聖町の北側）。一方、

「稲垣能登守」とあるのが西町奉行所で（現在の西ノ京北聖町）、二箇所「稲垣能登守組屋鋪」とあるのが東町奉行所与力・同心屋敷（現在の西ノ京職司町西側と西ノ京勸学院町）です。この絵図の年代は、東町奉行として土屋氏（土屋越前守）の在任と西町奉行として稲垣氏（稲垣能登守）の在任が重なる時期から特定できません。土屋越前守正方の在任は宝暦二年（一七五二）〜宝暦三年（一七五三）で、稲垣能登守正武の在任は寛延二年（一七四九）

御土圍地蔵



西ノ京職司町

④



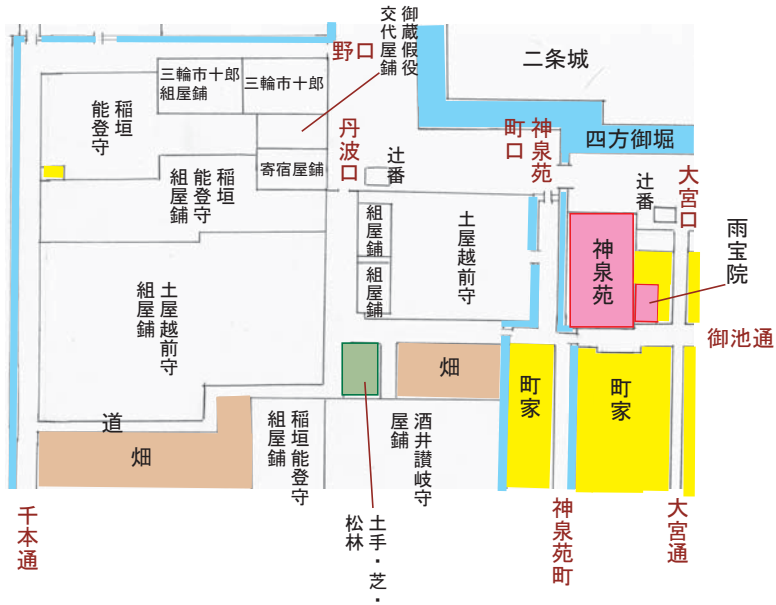
〜宝暦六年（一七五六）です。したがって、この地図は、宝暦二年（一七五二）頃の二条城近辺を示していることとなります。このときの京都所司代は、酒井讃岐守忠用（在任宝暦二年（一七五二）〜宝暦六年（一七五六））で、本シリーズ第24回で述べたように、山脇東洋に日本最初の人体解剖を許可した人物です。この部分図にある丹波口のところから南に延びる道筋と推定される記述が、『京町鑑』（宝暦一二年（一七六二）刊行）にありますので、照らし合わせてみましょう。横町としてあげてある御池通の末尾の部分です。文中に、絵図のどこに当たるかについて注を入れておきました。

（神泉苑の西側の記述のあと）此西の筋東側敷也。西側に町奉行御屋敷（注、図の「土屋越前守」とある屋敷）、北へ行ば御城の馬場へ出る（注、図の「神泉苑町口」を経由）。又右神泉苑の西は御組屋敷（注、図の「土屋越前守組屋鋪」とある屋敷）にて行當る。俗に御池屋敷と云。南へ行道は俗に三條屋敷と云御組やしき（注、図下部の「稲垣能登守組屋鋪」とある屋敷）也。北へ行ば御城へ出る也（注、図の「丹波口」を経由、この南北の通りを現在の美福通に比定）。

『京町鑑』、宝暦一二年（一七六二）

『新修京都叢書第十巻 山城名跡巡行志・京町鑑』光彩社、一九六八
ここからは、推定に推定を重ねます。この部分図の元図（二条御城廻絵図）は、土地の用途を色分けで示しており、黄色の土地は町家、桃色は寺社、鶯色は「土手、芝、松林」などと注記が

宝暦二年（一七五二）頃の二条城の西南地域
二条御城廻絵図（京都大学図書館蔵）をもとに作図



してあります。ちょうど、鶯色で色づけした土地が、酒井邸の北側にあります。この土地と畑の間に南北の道があるように見えませんが、ここは水路であった可能性がります。というのは、ずっと時代が下って明治一〇〜二〇年代の地図には、酒井邸にあった池らしい遺構を描いたものが散見されますので、畑の北側と西側（畑と鶯色で示した土地の間）に沿って、この池への導水路があったとみてよいでしょう。すると鶯色で示した土地はこの水路の土手であったと推定できます。

惜しいことに、土手と推定した土地は美福通に比定した通りに面していて、御土圍地蔵と町名看板④がある道筋とは一筋ずれています。強いて関係づけるとすれば、この土手に祀られていた地蔵尊を移したか、地蔵尊の名前に「御土圍」を付けて土手があったことこの記憶のために残したか。確証はえられませんが、この程度の詮索で終えておきましょう。

■ 小浜藩邸の跡

前節の詮索は結局推定に推定を重ねた結果に終わってしまいました。その副産物は、江戸時代中期（十八世紀半ば）の京都の東西町奉行所の概略がわかったことです。また、小浜藩酒井氏の京都藩邸の概略もわかりました。

上述の二条御城廻絵図（京都大学図書館蔵）をもとにした略図では、まだ開通していませんが、神泉苑町通の一筋西の細い南北の通りは、矢城通といえます。矢城通と御池通の十字路の西南角に、「若州小浜藩邸跡」の碑が建っています。

「若州小浜藩邸跡」の碑



この屋敷は、北は御池通（上記略図によれば、御池通より少し南）、南は三条通、東は神泉苑町通（実際は通りの両側に町家があり、その西側の水路が東の端）、西は美福通（智恵光院通）までを占めていました。この屋敷は、大政奉還の際に、徳川最後の將軍慶喜が滞在して、評議を重ねたところです。

矢城通を南下して、姉小路通を東にはいったところに、町名看板「西ノ京池ノ内町」⑤が掲げてあります。

この町名は、小浜藩邸内にあった池がその由来と推測されます。明治二二年（一八八九）「京都市街新細図改正新刻」（日文研 002148005）では、小浜藩邸の故地に、大きな池が描かれています。同じ年（明治二二年（一八八九））の「京都十五号（仮製地形図）二万分一之尺」（日文研 002469278）では、すでに池がなく畑地になっています。したがって、小浜藩邸が取り壊されたのも庭園の池がしばらくは残っていたが、明治二二年（一八八九）



西ノ京池ノ内町 ⑤

に至って埋め立てられたことが確定できます。のちに町家が建てられて、「西ノ京池ノ内町」という町名が生まれたのでしょう。

■ 勸学院と奨学院の跡

坊城通とおぼしき南北の通りさらに南下、姉小路通との交差点のところに姉坊城児童公園があります。この公園の南隣のお宅に、消火器と「西ノ京勸学院町」の町名看板。さらに南へ。三條通商店街のアーケードにたどり着く直前に、「従^{これより}是東北勸学院址」の碑が建っています。

勸学院は、藤原冬継（宝龜五年（七七五）〜天長三年（八二六））が弘仁二二年（八二二）に建てた、藤原氏出身の大学寮学生のための寄宿舎。貞観一四年（八七二）、大学別曹（いわば大学寮外寄宿舎）となりました。『山城名勝志』巻四の「勸学院」の項には、『貞観格』を引用して、次のように記載されています。

勸學院 西宮記云、三條ノ北、壬生ノ西、藤氏ノ學生ノ別曹也、本冬嗣大臣ノ家



西ノ京勸学院町の消火器



「従是東北勸学院址」の碑

貞觀格云、勸學院一區在左京三條一坊、件ノ院ハ是贈太政大臣
正一位藤原朝臣冬嗣、去弘仁十二年所二建立一也、即爲一
大學寮ノ曹司一、貞觀十四年十月十七日

『山城名勝志』、大島武好、宝永二年（一七〇五）

『改定史籍集覽』二二二卷、近藤瓶城編、臨川書店、一九八四

新加通記類第一八

鎌倉中期に成立した『拾芥抄』の記載では、所在は「三条北
壬生西一丁」となっていて、この『山城名勝志』の割書と一致し

ます。

勸学院は、『玉葉』安元三年（治承元年（一一七七））四月二
八日の条を引用したように、安元の大火のときに焼失しました。
『玉葉』安元三年（一一七七）五月一日の条には、勸学院焼失・
再建について、関白の藤原基房（久安元年（一一四五）〜寛喜二
年（一一三〇））、関白在任は承安二年（一一七二）〜治承三年（一
一七九）と兼実とのやりとりが記されています。再建に関して、
「勸学院の廟堂（孔子廟）が建立以来開いたことがなく、内部の
仔細がわからないので、再建にあたって、どうするか調べる必要
がある」などの記載があります。大学寮の割書の孔子像について
の記載（上述）とともに、孔子廟については並々ならぬ関心を示
しています。五月一日の条の最後の部分には、焼失を惜しむ心情
が吐露されています（訓点など追加）。

件院、閑院贈太相国冬嗣（論題）、弘仁十二年建立ス。其後未レ
有ラ火災二、及三三百四十餘歳一歟。惣（すべて）天下之滅亡、別（わけて）
我氏之衰微。悲涙数行哀哉。

九条兼実『玉葉』

『圖書寮叢刊九条玉葉五』、明治書院（一九九八）

（書き下し文）

件くだんの院（勸学院）は、閑院かんいん 贈太相国 冬嗣ふゆつぐ、弘仁十
二年建立こんりふす。其の後未だ火災有あらず、三百四十餘歳に及ぶ
か。惣すべは天下之滅亡、別わかは我氏之衰微。悲涙数行 哀あはし
かな。

太相国は太政大臣のこと。藤原冬嗣は、閑院に住み、死後太政大臣を贈られました。兼実は「勸学院は藤原冬嗣が弘仁十二年（八二二）に建ててから、三四〇年あまり火災にあつたことはない。勸学院の焼失は、大きくいえば、天下が滅亡するくらいの大災害。藤原氏に限っても、その衰微をきたす大災害。涙が流れて、哀しみがますますばかり」と慨嘆しています。

古いことわざ「勸学院の雀は蒙求を囀る」は、日頃聞き慣れたことは自然に憶えることのたとえ。儒教から仏教に変わつていますが、「門前の小僧ならわぬ経を読む」と同様の意味。どちらのことわざも、「本当は、内容を理解していない」という揶揄する感じがありますね。しかし、よく考えると、学習とはそんなもの。習うより慣れる。習うは做う。学びは真似び。「形から入る」というのは学びの方法論としてはもつとも有効です。ちなみに、『蒙求』は中国の故事集で、かつては漢文の入門書として使われました。「蛭雪之功」のもとになった話（「孫康映雪 車胤聚螢」）や夏目漱石の号の由来である「孫礎漱石」など、おなじみの話が載っています。

「従是東北勸学院址」の碑のところから、坊城通を南下すると、三条商店街のアーケードのところできき当たり。三条商店街を西に抜けたところ、千本通・後院通との変則交差点の東北角のコンビニエンスストアの側面に、「従是西北奨学（院址）」の碑があります。下半分埋まっていますので下部は判読不能。

奨学院は、在原行平が元慶五年（八八一）に創設した大学別曹で、皇別氏族（源氏、平氏、在原氏など）、諸王などの子弟が寄宿



「従是西北奨学（院址）」の碑

し大学寮に通つたところ。『拾芥抄』は「勸学院の西に在り」と記していますから、現在の三条千本の東北にあたります。「従是西北奨（学院址）」の碑の位置は、立命館大学朱雀キャンパスの建物の千本通を挟んで向かい側で、ちょうど三条千本の東北角です。したがって、「従是西北（是より西北）」というのは、千本通の通りの上ということになります。あきらかに、位置からいっておかしいので、どこか別のところに建つていたものを現在の位置に移動したものでしょう。

奨学院も安元の大火のときに焼失したと推測されています。奨学院の長である奨学院別当の職は、奨学院が廃絶したあとも名譽職として残り、淳和院別当の職とともに、源氏の氏長者が襲う慣例になっていました。

坊城通は、三条通のアーケードのところできき当たりですが、西にすこしよれて続いています。さらに南下すると、路地の奥に杉春稲荷。表通りから奥まったところなので見落としてしまいそ

うですが、町内の鎮守として祀られているのでしよう。鳥居や覆屋も立派で、祠もきちんと手入れされています。

■ 東町奉行所の跡

二条城の堀の向かい、押小路通の南側、NTT西日本京都支店壬生別館の植え込みの中に、東町奉行所跡の碑（押小路通神泉苑町西入西ノ京職司町）が建てられています。すでに二条御城廻（おしろまわり）絵図の略図に従って説明したように、二条城が造営されたのち、このあたりは、江戸時代を通じて、幕府の京都支配の中枢が置か



杉春稲荷

れた場所です。

京都町奉行所が創設されたのは、寛文八年（一六六八）。京都所司代の権限のうち、民政上（司法・行政）の権限が委譲されました。町奉行所は東西に分かれて、東町奉行所は、神泉苑の西、美福通に至る一帯、もとの五味備前守屋敷（上記二条御城廻（おしろまわり）絵図の「土屋越前守」とある屋敷）の地に建てられました。

奉行所の組織は、いたって簡素で、奉行の下に与力二〇騎、同心五〇人。これで京都の市政一般（行政、司法、警察）と近隣の天領の租税徴収、寺社領の訴訟処理などをおこないました。これでは、とても人数が足りないのです、各町の自治組織を利用して統



「東町奉行所跡」の碑

治にあたりました。

神泉苑の西側の通りは、神泉苑町通（または神泉苑通）といいます。ほぼ、平安京の櫛笥小路に相当します。御池通に面したところに町名看板「御池通神泉苑町西入神泉苑町」⑧をみつけました。「上京区」となっているところがおもしろい。町名看板の①⑤は、いずれも「下京区」です。



御池通 神泉苑町 西入 神泉苑町 ⑧

町名について、ちよつと一休み。交差する通りの名前「神泉苑町」の「町」を「ちょう」と読むか「まち」と読むかはなやましいところですよ。『京町鑑』縦町の部に、二条城より北の「日暮通」の続きとして、御池通より南を神泉苑町通と呼ぶと載っています。さらに、別立てで、「神泉苑町通」の項があり、ここに示すように振りがながふつてあります。ここでは、この記載に従って、「神泉苑町通」としておきます。町名として使うときは、最近の慣例に従い、「神泉苑町」を使います。もつとも、江戸時代は、町名としても「神泉苑町」と呼んでいたとは思いますが。現行の町名の「神泉苑町」に合わせて、いつそのこと、「神泉苑町通」

に統一してもかまわないような気がします。

■ 町奉行所与力の文雅

■ 神沢杜口のこと

京都町奉行所の説明のついでに、西町奉行所の与力であった神沢杜口（宝永七年〔一七二〇〕〜寛政七年〔一七九五〕）について触れておきましょう。江戸時代の中期の俳人・随筆家で、『翁草』二〇〇巻を書いたことで有名です。『続近世畸人伝』巻之二に「其蛸庵杜口」の項目がありますので、引用します。「其蛸」は訓読みにすれば「そのひぐらし」。

其蛸庵杜口

其蛸庵杜口は生涯俳諧を好み、よき句ども多かりけらし。はじめ退隠する時、人の訪らひしにこたへて、

くちなはの見かへりもせぬはかまかな

此句あまねくいひもてはやして賞す。雅俗聞見の博き人にて、談話おもしろかりしかども、老後耳聾の故に、明暮、古文書のめづらしきを写し、又自ら見しことどもを筆にまかせてつれづれを消す。能筆にて根気も強かりしかば、凡二百巻におよび、翁草と号す。相識の人おのが好みにあたる巻々をかりうつしてもてはやせり。八十六にして乙卯の春なき名の数に入られし。

『続近世畸人伝』、三熊花顔、伴蒿蹊補、寛政一〇年〔一七九八〕

日文研データベース

<http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/kjindex.html>

不惑をすぎて隠居してから、執筆活動を本格化させた生き方は、痛快で畸人の名に恥じない。添えられた俳句は、「蛇が脱ぎ捨てた皮を一顧だにしないように、官を辞したのちは袴などの過去を思い出させるようなものには執着せず、新規まき直して今後を生きる」という気概を述べています。ただし、正面立つてことあげすることなく、蛇（くちなわ）をもちだしたところが洒脱でおもしろい。隠居前に生活費の当てを立てておき、隠居後は子供たちから独立、生活の垢がたまらないように何度も引越しをし、健康のために日々歩きながら、好きな文芸を楽しむ。実に悠々たるものです。『翁草』をおよそ一〇〇巻ほど書いたところで天明の大火（天明八年（一七八八））で稿を失うが、また書き直して二〇〇巻を完成させた根気は、積み重ねを大切に生じた生活態度によるものでしょう。

俳人としての神沢杜口の活躍は、与謝蕪村より少し前、後半は重なります。俳人杜口は松木淡々（延宝二年（一六七四）〜宝暦十一年（一七六一））の門人で、淡々の十連会の一人として重きをなしています。ただし、距離をおいていたようで、『翁草』では「そもそも洛の俳諧を中興せしも淡々、邪にせしも淡々なり」と評しています。

『万国燕』は、享保一三年（一七二八）に興行された十百韻（百韻は百句続く連句。この百韻を十巻続けること）二巻から松木淡々が高点を与えた句を抜き出して刊行したのですが、この中には、神沢杜口の句がたくさん載っています。

一片の日にとゞまるや花の星 杜 口
身と共に流にもどす化粧水 杜 口

『万国燕』享保一三年（一七二八）三、七四二、『江戸座点取俳諧集』鈴木勝忠他校注、新日本文学大系七二、岩波書店、一九九三

「化粧水」は、遊女が客を呼ぶ前に化粧をする水。連想するのは、本シリーズ第4回の「小野小町の化粧水」で、小町は遊女ということになります。これだと、化粧水は、西洞院川に注ぐ藍染川に戻すことになります。あるいは、第18回の蕪村と太祇が遊んだ「一条戻り橋の柳風呂という娼家」のことも思い出します。神沢杜口は柳風呂のことは確かに知っていて、その著書『翁草』には、「宝暦の頃には、松屋風呂（室町五条上ル）と柳風呂（一条堀川）があったが、今は皆なくなつた」と記されています。柳風呂だと、化粧水は堀川に戻すということになりますね。

もう少しまじめなところでは、蕪村の門人高井几薫が父几圭の十三回忌に編んだ『其雪影』に、上述の『続近世畸人伝』に引かれた句が「致仕」という添え書きのあとに載っています。『其雪影』の「秋冬の部」に採録されている杜口の句を、もう一句。
とろくくと寐る鳥あり十三夜 杜 口

『其雪影』高井几薫編、明和九年（一七七二年）三二四『天明俳諧集』山下一海他校注、新日本文学大系七三、岩波書店、一九九八

なお、この句集の「春夏の部」の最初に、与謝蕪村の有名な句「春のうみ終日のたりたりかな」があげられています。

■ 平塚飄齋のこと

平塚飄齋（寛政六年〔一七九四〕～明治八年〔一八七五〕）は、京都東町奉行所与力で、本名は茂喬、筆名は津久井清影。通称は、表次郎など。葛野郡朱雀野村大字西ノ京字京職町の生まれ。ここは、上述したように、京都東町奉行所の組屋敷（役宅）があったところ。安政六年〔一八五九〕に安政の大獄に連座して永蟄居を命ぜられました。のち文久二年〔一八六二〕に許されました。山稜の研究家で、『陵墓一隅抄』『聖蹟凶志』などの著書があります。頼山陽などと交流があったことが知られています。

平塚飄齋については、幕末の世情騒がしい京都にあって公務をこなしながら文雅の道に励んだ生き方に興味が引かれます。まず、当時の人名録『平安人物志』（日文研でデータベース化されています）を調べてみましょう。

『平安人物志』の文政一三年〔一八三〇〕版には、「文雅」の項が立てられていて、そこに平椿孫、通称は平塚某として載っています。次に体裁をまねて、『平安人物志』の記載を引用します。

平 椿孫 号齋堂野夫 節齋男 平塚 某

「平塚某」としたのは、与力としての公務があるので、平塚飄齋あるいは平塚茂喬を直接に載せることはせず、名前を伏せたものと考えられます。号の齋堂野夫は、何と読むのでしょうか。語呂合わせがあるのかもしれませんが、どうもよくわかりません。

ところで、居所の欄の「節齋男」が、地名を示しているとはとてもおもえないことに気がきます。気になったので、『平安人物

志』文政一三年〔一八三〇〕版を、再度、丁寧に調べてみました。すると、「文人画」の項に、次のような記載を見つけました。角書にした「墨竹」は、欄外に手書きで追加されている文言です。

墨 竹 平 茂清 号節齋 城西 平塚 某

平塚茂清。城西（二条城の西）に住み、文人画とくに墨竹に巧みであった人物。号は節齋。したがって、平椿孫（平塚飄齋）の居所の欄にある「節齋男」は、平塚節齋の息子という意味で、これをもつて居所を代用したことが判明します。あわせて、「平塚某」が親子で出てくるので、両者を区別するためもあったと考えられます。

次の天保九年〔一八三八〕版の「文雅」の項では、居所として城西と記載されています。ここに居所の記載がある一方で、もはや「文人画」の項には父親の「平茂清」の記載が消えています。「節齋男」↓「城西」の変更は、父親の死去により親子を区別する必要がなくなったためとみてよいでしょう。

平 椿孫 号齋堂野夫 城西 平塚 某

『平安人物志』の嘉永五年〔一八五二〕版の「文雅」の項に至って、本名の茂喬と通称の平塚飄齋が記載されています（ただし、飄ひらの旁は風の異体字が記載されています）。注記として「著述數編あり。票目標之を略す」と載っています。号の欄は空欄で、それまでの号の齋堂野夫の人物と同一人でないと言いつれで、それに配慮がなされているというのは考えすぎでしょうか。しかし、よくみれば、住所の「城西」を同じにすることによって、「平

椿孫」と「平 茂喬」が同一人であることをそれとなく示しているようです。後述するように、嘉永元年（一八四八）頃には、平塚飄齋は隠居していたと推定されますので、本名を出しても差し支えがないという判断があつたのかもしれない。

平 茂喬 号 城西 平塚飄齋

著述数届票目略之

平塚飄齋は、安政の大獄（安政五年（一八五八）～安政六年（一八五九））に連座。安政六年（一八五九）に水戸方に荷担したとして、京都所司代より永蟄居（文久二年（一八六二）まで）を申しつけられました。このためと推定されますが、『平安人物志』慶応三年（一八六七）版の「文雅」の項では、別名の津久井清影による「平 清影」が記載され、平塚某に戻されています。居所の「城西」は、二条城のはるか西。現在は、右京区西院さいいんみつじざらちやう院けん町に平塚飄齋邸趾の碑が残っています。

平 清影 号半樂舎 城西 平塚 某

『平安人物志』の記載の変遷をみると、平塚飄齋が公務と文雅を調和させるのに、腐心していることがうかがえます。とくに、主著である『陵墓一隅抄』『聖蹟図志』などを別名の津久井清影で執筆していることなどに、公務と峻別しようとする意図がうかがえますね。

それにしても、安政の大獄による永蟄居（安政六年（一八五九）～文久二年（一八六二））のときは、事情はもつと深刻で、名前を著書に書くことはばかられました。この謹慎のときに平塚

飄齋がどのように動いたかをみると、根性がすわっていることがよくわかります。このとき、平塚飄齋は『再花洛名勝図会』（元治元年（一八六四）刊行）の刊行を、匿名に近い形でおこなっているのです。本シリーズでは、江戸時代中期の京都案内書である『都名所図会』や『拾遺都名所図会』（いずれも秋里籬島著）などの記述や挿絵を参照してきましたので、その後継である『再花洛名勝図会』の成立事情が気になるところです。ついからですから、労を惜しまず調べてみましょう。

『再花洛名勝図会』巻末の予告をみると、先行の案内書（『都名所図会』や『拾遺都名所図会』など）の記述が八〇年余を経過して古びたので、「再撰」することを目差した案内書であることがわかります。完成すれば当時の京都地誌となつたはずですが、東山の部分だけを上梓したところで、幕末の争乱のために中断しています。著者の「再撰」にこだわった意図に反して、書名『再花洛名勝図会』の角書「再撰」を省略して、しばしば、単に『花洛名勝図会』と呼ばれています。本シリーズでも、この慣行に従っておきます。

日文研でデータベース化され公開されている影印をみると、『花洛名勝図会』の刊記には、

四條以北 晴翁木村明啓
 撰者 全以南 櫪園川喜多真彦
 撰并備書 全 半山松川安信
 全 春翠四方義休
 全 東居樸川重寛
 文久元年辛酉十一月官許
 元治元年甲子三月刻成

となつていたので、通常は木村明啓（暁鐘成）と川喜多真彦が著者であるとされていますが、実際は平塚飄齋が陰の著者であったことが、いろいろな論考からわかっていきます（たとえば、「平塚飄齋の研究」、『森鏡三著作集』第三卷、人物篇、中央公論社（一九七三）、西野由紀「再撰花洛名勝図会の作者と全体像」、『國文学論叢』51、三九〇～五二二（二〇〇六）、菅宗次「平塚飄齋の文事―京都東町奉行所与力の文雅」、『武庫川女子短大紀要』55、一五九〇～一六四（二〇〇七））。これらの論考を参考にしながら、『再花洛名勝図会』の著者が平塚飄齋である根拠を自己流に組み立ててみましょう。

蔣潭鰈侶の署名がある『花洛名勝図会』（影印が日文研でデータベース化されています）の序には、漢詩を掲載したのち、次のように記しています（訓点や送りがなは仮に付したものです）。

夏日、津久井翁、以三所撰、東山名勝図誌、見示首栽
 四条橋、乞書、此詩于卷端、因略絵一揮、以塞其責。

（書き下し文）

夏かじつ日、津久井の翁、撰せんする所の東山名勝図誌を以て、首栽の四条の橋を見示し、此の詩を巻端に書くことを乞ふ。因て絵を略し一揮して以て其の責を塞ぐ。

理解のためのメモ。「見示」は、あらわしてはつきりと示すこと。「首栽」は首載（最初に掲載する）の意味か。「巻端」は、書物の書きはじめの所。

この序文の中に「津久井の翁、撰する所の東山名勝図誌を以て」とはつきり書いてありますので、平塚飄齋（津久井清影）が『花洛名勝図会』（＝東山名勝図誌）の著者（の一人）であることは間違いないでしょう。

序を書いた蔣潭鰈侶は、浅野長祚（文化一三年（一八一六）～明治一三年（一八八〇））のこと。号は梅堂、蔣潭、蔣潭鰈侶、池香など。字は胤卿など。漢詩、俳句、書画に秀でていました。京都西町奉行の在任は、嘉永五年（一八五二）～安政五年（一八五八）です。この在任中に、与力平塚飄齋の協力で洛中洛外の山稜調査にあたり、『歴代廟陵考補遺』を著しました。これが、浅野長祚と平塚飄齋の接点です。安政五年（一八五八）の町奉行辞任は、水戸派とみなされ大老井伊直弼にいらまれたための免職です。井伊直弼の死後、復帰して江戸北町奉行となつていますが、慶応三年（一八六七）に致仕。絵は椿椿山に師事したといえますから、この序文冒頭の漢詩は、浅野長祚の描いた絵の賛であつたのを、平塚飄齋の所望により、「絵を略して、転載したものでしょう。

『花洛名勝図会』のもう一つの序文は、藤原芳樹が記したも

ので、「わが友津久井の翁が秋里籬山の『都名所図会』が時を経て実情に合わなくなつたのを書き改めたもの」という件があります。藤原芳樹は長州の人。伊藤芳樹とも。『寄居歌談』などの著書があります。

この二つの序文からは、津久井の翁（平塚飄齋）をもう一人の著者として付け加えるべきだという結論が導けます。

ちなみに、この二つの序文のほかに清原宣明による序がついています。その中には「作者請題一言。因爲書之。時文久二年春花朝日」（訓点追加。「作者、題一言を請ふ。因て、爲に之を書す。時に文久二年春花朝日」とあります。この文中の「請題」が行書だと「清影」に見えて仕方がありません。多分、「津久井清影」の字面を見過ぎたための空似ですね。

さらに傍証を追加しましょう。『花洛名勝図会』の例言には、「亡くなつた小沢華嶽と井上左水の描いた遺稿があるものは、これらを挿絵として使つた。残りは半山、東居などが新しく描いたものを入れた」とあります。この例言は作者が書いたものと推測されますが、画家への言及の仕方から考えて、次に示す跋文（あとがき）の「翁」と同一人物であろうと推定できます。

その推定の根拠を示すために、川喜多真彦による跋文を翻刻したものの一部を西野の論文から次に引用します。

（前略）また都に近き大和河内などの國々なる、往昔の大宮所のありし跡のさだかならぬをたづね索め、はたいともかしこき御陵どものうづもれたるをも土地に考へ、書に徴してかき著はしつゝ、家に秘めたまへる翁あ

り。はよう公の仕へを退きてより、（後略）

この中で言及されている「翁」は、「御陵」などの語が出てくることや、仕事を辞めているという記述などから、平塚飄齋であると比定できます。

さらに、跋文の続き、該当するところを要約すれば、

この「翁」は、『都名所図会』や『拾遺都名所図会』につづく案内書を再撰することを思い立つて原稿を書いていたが、知人の挿絵画家（小沢華嶽と井上左水）が亡くなつたので、企ては頓挫してしまい、原稿もそのまま放つてあつた（「今は便なしとおもひくづをれて、自らの稿もかいやられしに」。ところが、大阪に出かけた折に、暁晴翁（木村明啓、暁鐘成）による『撰津名勝図会大成』の稿が成つたことを聞きおよんで、その挿絵画家松川半山を知つた。『再撰花洛名勝図会』の挿絵を依頼することにし、同道して五〇枚以上を描かせ、足りないところは、東居、春翠などに描かせた。

この記述と『花洛名勝図会』の例言の記述と照らしあわせると、どちらも亡くなつた画家（小沢華嶽と井上左水）への言及があり、跋文の「翁」は、例言を書いた作者と同一人物であることを強く示唆しています。「翁」自らの草稿を放置してあつたという記載があり、さらには文章は暁晴翁と余（跋文の筆者の川喜多真彦）に「誂へて書きつづらせ」とありますので、「翁」が書いた草稿をもとに執筆させたことがわかります。また、「翁」自ら無

駄を省き誤つたところなどを正したと記されていて、平塚瓢齋が監修・校訂をおこなったことを示しています。現代風に書けば、「平塚瓢齋編著、木村明啓・川喜多真彦著」となりますね。

平塚瓢齋の人となりについては、同時代の興味深い資料があります。それは、木村黙老から小津桂窓に宛てた書簡です。木村黙老（安永三年〔一七七四〕〜安政三年〔一八五六〕）は高松藩家老。小津桂窓（文化元年〔二八〇四〕〜安政五年〔一八五八〕）は伊勢松阪の豪商。両者は曲亭馬琴の知己として交渉がありました。嘉永元年（一八四八）五月二十日の黙老から桂窓宛の書簡の一部を次に引用しましょう（振りがな追加）。

嘉永元年五月二十日桂窓宛書簡

（前略）

此度京師在寓中、二条与力之隠居平塚瓢齋与申人、知人
 二成申候。至而、稗官好き之人二而、色々面白キ話
 も承。候。是も八犬伝大ニ称美二而、例之薄様紙
 摺之本も所持致被レ居候。全体者俳人と相見へ候へ共、
 随分詩文章も出来、狂詩・狂歌等も見せ被レ申候。余程
 の強キ人二而、五畿国掌覽微細之図被レ撰候而、
 宜敷出来居申候。八犬伝批評も致候書在レ之。当時、
 為レ写居申候。写一致出来一候ハ、掛御目一可レ申候。且、
 書肆之頼之由二而、当時、都名所図会原板図籙漏二付、
 細図取調二懸候由二而、板下之細図被レ見候。
 （後略）

木村三四吾『滝沢馬琴? 人と書翰』第二巻、八木書店（一九九八）

参考資料、四六九ページ、「木村黙老書牘集」

先に言及した『花洛名勝図会』の例言に、「さるに其本原たる都名所の沿革異同あるのみならず、圖作の粗漏之を他邦に比すれば恥る事多し。」という件があります。上記書簡の「都名所図会原板図籙漏二付」という表現が似ていることが注意されます。このことは、『花洛名勝図会』の例言にある言葉も平塚瓢齋が発したものであることを示唆しており、つまるところ、例言は平塚瓢齋が書いたということの傍証となるでしょう。

この書簡の日付が嘉永元年（一八四八）であることにより、平塚瓢齋がこのころからすでに『花洛名勝図会』の執筆に手を染めていたことがわかります。「二条与力の隠居」とありますから、この時点ですでに隠居していたこともこの書簡から判明します。そのほかにも、「稗官好き」（稗官は、民間伝承を集めて王に奏上した役人または集めた民間伝承のこと）であったこと、総じて俳人であるが詩文章もうまく狂詩・狂歌等も詠むこと、「穿鑿の強き人」で、近畿一円の案内図を編纂していること、馬琴の『八犬伝』をほめ批評も書いていること（この点で、木村黙老や小津桂窓が馬琴と連絡を取りながら『八犬伝』の批評していたことに繋がります）など、平塚瓢齋の性向や行状がうかがえます。

■ 武信 稻荷

神泉苑町通（または神泉苑通）を御池通から南下したところ
 で、折よく「姉小路通神泉苑町東入姉西町」⑥を見つけました。
 スポンサーはアリナミン（武田薬品）。

あねやうじどおり 神泉苑通 姉小路 東入 姉西町 ⑥



江戸時代中期の『京町鑑』では、「姉小路」通と振りがなを振っています。現在では、「が」が「や」と訛つて、「あねや・こうじ」と読むのが普通のようなのですが、「あねこうじ」とも読むようです。ついでに、『京町鑑』では、姉小路通の横町として、大宮西入に「姉小路西町」があることが記載されており、

大宮西入
姉小路

此町南側に蓮光寺(蓮)といふ云眞言宗(有)あり。此町の西の辻神泉苑町(ゆきあたりの町)に行當也

と説明されています。この説明の「姉小路西町」が略されて、「姉西町」になったのでしょうか。この引用文の姉小路が突き当たった神泉苑町通（町名看板⑥のあるところ）の西側は、上述の若狭小浜藩の藩邸です。現在の姉小路通は、町名看板⑥のあるところで行き当たりではなく、千本通まで続いています。

町名看板⑥のあるところから、姉小路通を東へゆくと、北側に廃校になった教業小学校。いまは、洛中小学校の付属施設とし



元教業小学校



蓮光院（北向き不動）

て使われているようです。元教業小学校の向かいに、北向き不動さんがあります。「北不動明王」の扁額と「毎月二十八日に大護摩供養をおこなう」旨の張り紙。本尊の不動明王は、もと神泉苑南門の安置仏と伝えられています。このお寺の正式名は、弘仁山蓮光院（中京区姉小路通大宮西入姉西町、高野山眞言宗）。「院」が「寺」に変わっていますが、上記『京町鑑』の記載通りです。

神泉苑町通を南下し、三条通商店街を通りすぎて、六角通までゆくと、如来寺（第24回で紹介）で突き当たり。ここは、六角通との変形十字路になっています。西に折れて、六角獄舎跡（第24回で紹介）をすぎ、一筋西の通りを北へゆくと、武信稲荷神社の鳥居があります。三條商店街のすぐ南とは思えないくらいに鬱蒼とした木立の境内です。社伝によれば、貞観元年（八五九）に



武信稲荷



武信稲荷の榎

藤原良相（弘仁四年（八二三）〜貞観九年（八六七））の創建。のちに、藤原武信（生没年不詳）が信仰したことにより、武信稲荷を呼ばれるようになったと伝えられています。

このあたりの町名は、「今新在家西町」。西隣の壬生馬場町は、平安時代には、勸学院の南にあたり、藤原良相（弘仁四年（八二三）〜貞観九年（八六七））の建てた延命院（藤原氏の医療施設）がありました。武信稲荷は、勸学院と延命院の鎮守であったと伝えられています。寛永年間（一六二四〜一六四四）に今新在家西町の西側に摂津尼崎の青山氏の京邸が置かれの（『京都市の地名』「今新在家西町」の項）、武信稲荷はこの邸内に含まれていたと推定されます。

武信稲荷社殿の南には、榎の巨木があります。この巨木は、平

重盛が安芸宮島から移したと伝えられ、中京区の区民誇りの木（指定番号E-02）に指定されています。前回（第24回）紹介した六角獄舎は、この巨木のすぐ南です。口伝によれば、妻のおりょうの父が捕らえられている六角獄舎の内部を、坂本龍馬が、この木に登つてうかがったといわれていますそんな危険なことをする筈はないというのは素人考えでしょうか。ただし、龍馬だったらやりかねないという声も聞こえます。

武信稲荷のご利益は、必勝祈願。「勝駒」というお札が授与されます。また、平成二二年のNHKの大河ドラマに因んで、龍馬・おりょうの縁結びの守りや絵馬も授与されます。

■ 二条陣屋

六角大宮の十字路から、大宮通を北へ進みましょう。三条通商店街の西南角に三条大宮児童公園、北側は三条通商店街に面しています。この公園には、ケヤキの大木があり、「三条大宮公園ケヤキ」として中京区の区民誇りの木（指定番号E-01）に選ばれています（写真中央に幹がちよつとだけ写っています）。

大宮通をさらに北上して、姉小路通をすぎると、二条陣屋（小川家住宅）。寛文年間（一六六一〜一六七三）に建てられた建物で、国の重要文化財。二条城や京都所司代に伺候する諸大名や奉行所の公事宿として利用されたので、贅を尽くした造作とつり階段などの防衛上の工夫が一体となった建築です。京都市による駒札を引用しておきましょう。

三條大宮児童公園



二条陣屋（重要文化財） 小川家住宅

豊臣秀吉に仕えて伊予今治七万石の城主となった小川土佐守祐忠は、関が原の合戦に破れて出家し、その長男千橋が、萬屋平右衛門と名乗って、この地で米、兩替を商ったが、この建物は、その住宅として寛文十年（二六七〇年）頃に創建されたものである。

当家は、二条城や京都所司代に伺候する諸大名の

二条陣屋（小川家住宅）



陣屋として、また京都奉行所の公事宿としても利用されたので、ただの住宅ではなく、特殊な構造、設備が施され、防火上の工夫も多い。

建築様式は数奇屋式住宅で、極めて繊細優美であり、建築学的価値も非常に高いとされている。

昭和十九年（一九四四）に、数奇屋式住宅、陣屋式建築、防火建築の三点から、当時の国宝保存法に基づく国



おみやとおり 御池下ル 三坊大宮町 ⑦

室に指定され、昭和二十五年、文化財保護法により重要文化財に指定された。

京都市

二条陣屋（小川家住宅）の斜向い。東側のお宅の側面に、町名看板「大宮通御池下ル三坊大宮町」⑦が掲げてあります。ポスターは不明。

御池通に出るすこし前の西側に、木製の大きな看板「都あられ東坂」。都あられの文字は右横書です。東坂米菓の玄関は店舗風でなく、引戸が閉まっているので、看板を見ないと見逃してしまいます。



プロフィール

藤田眞作（ふじたしんさく）。一九四四年（昭和十九年）北九州市生まれ。学生・大学助手として、十年間、京都で生活。工学博士を取得後、二十五年間、富士写真フイルム（株）足柄研究所にて、記録材料用の有機化合物の開発に従事。次の十年間は、京都工芸繊維大学教授として、有機合成化学・情報材料化学・化学情報学・数理化学の研究教育に従事。そのかわら菓子をもとめて京都市内を徘徊し、仁丹の町名看板に興味をもつ。二〇〇七年より、湘南情報数理化学研究所 (<http://xyntex.com>) を主宰。

「仁丹の町名看板をよすがに京めぐり」（第25回）2010/05/16
 © 2007, 2008, 2010 藤田眞作 <http://xyntex.com/>